

# メディアのミクロ社会学

(筑摩書房 1989 年)



伊藤 守

## 個人的な思い出から

あらためてこの本の奥付を見ると 1989 年の刊行である。思い起こせば、4 年ほど高校の教師をしてから大学院の博士課程に入り直して 3 年が過ぎ、はじめて非常勤講師を務めた年である。講義を 1 つ、そして夜間部の 3 年のゼミを担当した。あらためて、「そうか、あの時期にこの本に出会ったのだ」と懐かしく思った。

修士課程ではフランクフルト学派の第二世代と言われたハーバーマスの理論——『史的唯物論の再構成』の読解に取り組んでいた。コミュニケーション論の視点から唯物論を再構成することを試みたもので、ドイツ語の辞書を片手に熱心に読んだし、この著作を契機にピアジェの発達心理学やウィニコットの心理学、オースティンやサールの言語行為論、そしてゴフマンの著作などコミュニケーション分野に近接する関連分野の研究に眼を通した。試行錯誤しながらも、とにかくハーバーマスを主な研究対象にして論文を書いた。論文提出のすぐ後に『コミュニケーション的行為の理論』（原著 1981 年刊行）が出版されたこともあって、社会人として生活した 4 年間のブランクを経ても、ハーバーマスの理論を参照しつつ社会理論としてのコミ

ュニケーション論を考えていたのが博士課程の 3 年間だった。

その頃、ようやくイギリスのカルチュラル・スタディーズの動向も視野に入りはじめ、一方でデリダの著作もかなり乱読して、「ハーバーマスとデリダのコミュニケーション論」という拙文や、カルデロンを中心にバロック期の聖と俗の転換を描いたベンヤミンの著作『ドイツ悲劇の根源』を読み解くことを目指した「ベンヤミン：〈近代〉の根源とその覚醒～翼ある憂鬱の精霊に」といった原稿も書いた。

つまり、博士課程に入ってもなお、自分の研究が文化社会学なのかコミュニケーション研究なのか、そもそも社会学の分野の研究なのか、よく分らない、ふらふらした、鬱屈した心境で過ごしていたのである。それが非常勤としてはじめて学生を教えた 1989 年頃だった。

担当したのは「メディア論」のゼミである。何を讀もうか、と考えた結果がマクルーハンだった。やや「軽く」見ていたのである。学生ではなく、マクルーハンを、である。もちろん、彼の本は手元においてバラバラページを捲ったことはあった。だが、真剣に読むこともなく済ましていた。1960 年代に一風を風靡したメデ

メディア論から見たマーケティングのための本といった印象で——今回、『メディアのミクロ社会学』を読み返すと、渡辺先生も、マクルーハンに、私とほぼ同じようなところから入ったことが分かって安堵した——鼻から「軽く」見ていたのである。

学生と一緒に精読しはじめて、もちろんその印象は一変した。ベンヤミンやハーバーマスを通して、新聞やテレビのことも視野に入れてコミュニケーションの問題を考えてきたつもりだった。しかし、実際には、メディアのことを、メディアに媒介されている、ということ正面から考えてこなかったことを痛感させられた。メディア論をしっかりとやらなければ、と思わされたのである。

ちょうど、そうした時期に、この本、『メディアのミクロ社会学』に出会ったのである。率直に驚いたし、心を揺り動かされた。いま思い返せば、その理由はけっして一つではなかった。

### メディアのミクロ社会学の魅力

一つは、文体の魅力である。専門書ではあるが一般読者向けの本ということもあったのだろう。しなやかで、繊細な、「ほくは」という主語で書き始められる文体に魅了された。当時は、上述のように、ハーバーマスやベンヤミンそしてアドルノといった批判理論を中心に読んでいたこともあり、また紀要や学会誌に論文を書くことばかり考えていた私にとって、こうした書きぶりで書いてもよいのだ、という強烈なインパクトをこの本から受けたのである。

第二の理由は、その時期、私のマクルーハンに対する理解がどの程度だったか心もとないが、この本がマクルーハン理論のもっとも重要な論

点を十分に理解して書かれていることに対する驚きだったと思う。しかも、たんなる紹介ではなく、自身のメディア体験に即して、電話、オーディオ、写真、テレビ、活字といったメディアの特性が的確に、わかりやすく、つまりは「核心をつく」かたちで論じられていた。それはとても強烈な印象だった。本には、赤い線が何本も引かれ、普通の鉛筆の黒い線もその赤い線に重ねて引かれている。たぶん、二度、三度と読み返した痕跡だろう。繰り返し指摘すれば、「メディアをこういうかたちで理解しなければならないのだ」「メディア論とはこういうアプローチで社会と人間の理解に努めていくことなのだ」と私にはじめて訴えかけてきたのがこの本だったのである。今回再読してもその認識は変わらない。

『メディアのミクロ社会学』は、私にとって、そしてたぶん日本の社会学にとっても、はじめての本格的な「メディア論」の本だったのだ。

第三の理由は上述のことがらよりずっと個人的なことがらに属する。この本を執筆した渡辺潤という研究者が、私より5歳上の方であること、より直截に言えば、5歳しか年上でないこと、に対する驚きだった。5年後に、私がこういう魅力的な本を書けるとは到底思えなかった。そうであるだけに、他のところでも書いたが、「いつかはこういう文章を書きたい」「こういう文章を書ける研究者になりたい」と心底思った。当時は、面識もないこの研究者を、一方的に師と仰いだのである。

それだけではない。私の関心がフランクフルト学派から次第にカルチュラル・スタディーズに移行したこともあるが、たぶんそれ以上にこの本との出会いによって、メディアとコミュニ

ケーションの分野で研究することの面白さを実感し、この分野で研究する覚悟を自覚させてくれたように思うのだ。思想史や学説史ではなく、実証と理論を往還するようなスタイルで文化とメディア・コミュニケーションの分野で勝負することに導いてくれたのである。

#### いまでも関心を触発する

あらためてこの本に眼を通していても、まったく古びた印象がない。もちろん、ここでは、ケイタイについても、パーソナル・コンピュータについても、モバイルメディアについても書かれてはいない。しかし、文章が、澄み切っていて、瑞々しいのだ。

「序」は「メディアのフレーム」というタイトルがつけられ、「拡張」と「縮小」、「結合」と「分離」そして「フレーム」といったすぐにマクルーハン、ジンメル、ゴフマンからの引用と分かる概念群が駆使され、この本の基本的パースペクティブが提示されている。その上で、「単なるメディア論というだけでなく、メディアを分析する手法を、その基本となる人間関係を軸に見ていこうという狙いがある。人びとが日常的にするフェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションを機軸にして、自己意識の持ち方や、世界観が、メディアの変遷につれてどのように変容するものなのかを調べるところに、その主題がある」と、本書のテーマが明確に述べられている。

言うまでもなく、それまでの効果研究やメディア接触行動研究から一線を画して、わたしたちが引き継ぐべきメディア研究の主題がここでははっきりと述べられていることが分かるだろう。いまでは当然の主題と考えられるかもしれない

が、この本が出版された1989年の時点で、こうした主題設定自体が新鮮で、斬新な問題提起だったことを、あらためて強調しておこう。

「電話のコミュニケーション」と題された第1章から終章「リアリティの行方」まで、電話、オーディオ・メカ、写真、テレビ、ペン、活字というメディアが自己の在り方や人間の相互行為関係の変容にいかにかかわるかという視座から精緻に論じられた内容をすべて紹介することは必要ないだろう。ただ、現在でも私たちの関心を触発する文章を引用しておきたいと思う。

たとえば、電話の章ではこんな文章に出会う。「話すことの強制。それは電話のコミュニケーションについてまわる宿命である。そして、沈黙を許さないというメディアの特性は、私たちに、演技的な関わりを要求しないではおかない。沈黙は意図的というよりは偶発的に生まれるものだが、それが許されないということは、電話のコミュニケーションには筋書き通りのやりとりが必要なことを意味している。ドラマの間はあっても、沈黙はない」という。

あるいは次のような文章。

「人を時に正直にし、また嘘つきにする電話、遊び心を容易に引き出し、簡単に変身させる電話。あるいは人を冷淡にも、優しくもする電話。それは対面的な関係におけるよりもコミュニケーションの中に演技的な側面をもちこみやすいことを示すものであるし、また、否応なく虚構の世界を作り出してしまいうことも意味している」と。

こうした文章に出会うとき、その文章の真偽とは別に、無意識のうちに繰り広げられているメディアと人間との密やかな日常の関係を想起し、言語化するための、さまざまな思索の過程

に引き込まれていく。そして眼を閉じて、さまざまなことがらを想像し、反芻する時間に向き合うことになるのだ。

数字で実証するのではなく、書くことで事象を明晰にする力。これが、前述したように、この本の最大の魅力なのだと思う。

おわりに

渡辺先生との出会いは、東京経済大学に赴任されてからである。最初の出会いがいつだった

か不確かなのだが……………。

この本を書かれた後も、数多くの著作や翻訳を手掛けられ、メディア研究のトップランナーとして走りつづけ、多くの研究者を育てられた。まずはご苦労様でした、と申し上げたい。

そして今後も、深い森のなかでお好きな音楽を聴きながら、私たちの思考を駆動させる魅力的な文章を書かれるだろう。それを手にすることを楽しみにしたい。